

火星



平成19年8月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

竹林を蝶の出でくる朝ぐもり

松風を聞くサングラスはづしけり

白丁が箒ひきゆく早かな

大堰の水の全き夏の月

夏野中父の匂ひをたどりけり

母留守の父に昼寝の支度あり

熱帯魚のぞく昼寝の過ぎし貌

まつすぐに来る舟の上の白日傘

藻刈屑流れて来たる暑さかな

茶封筒また取り出せる生身魂

太白星

柳生千枝子

麦秋の風が遊べりひろやかに
鮎群れて急ぐ流れの色深く
風が梳く麦畑の色つややかな
麦秋や重たき母の裁ち鋏
麦秋の白雲が航く空深し
息深くして麦畑の風を吸ふ
麦畑の天近くなる息を吸ひ

杉浦典子

巖うらに水の斑ゆるる立夏かな
青梅の見えてくるまで耳澄ます

遠山に鼻筋向けて祭馬
そら豆をことば少なき子と剥きぬ
オートバイの尻並びぬる花うばら
黄菖蒲の辺りより水衰ふる
怒らせてしまひしあとの豆の飯

浜口高子

宵宮の越後のこごみまさをなる
でこぼこの土踏んで来し白牡丹
水馬の脚にゆらぎし有馬富士
草笛を放り人の輪崩れけり
千年の樹々に底あり田螺鳴く
ユーカーリの幹しらじらと蚊喰鳥
水流の盛り上がる辺の蛇莓

火星作品

山尾玉藻選

鳥籠の布一枚の明易し
八幡丸山照子

ぼうつたへ面舵とりし飛行船
緑蔭のパエリヤ鍋に木の杓文字

ぼうつたんの散る音したる正座かな

短夜の裏戸出でゆく煙草の火

ぐらぐらと日の傾ける麦の秋
明石戸栗末廣

ががらんぼの全き影を怖れけり

葉ざくらや兄をおもへば風立てる

焼き茄子のくたくたといふかたちかな

指先にひつついてゐる目高の死

滝音に向ける背骨のひとつづつ
宝塚山田美恵子

につくきは黄色き首かしら梅雨の闇

まつさらの湯の痛しとも夜の新樹

町内会長祭太鼓をちよつと打ち
鳴きあふれ樹よりこぼるる目白どち
交番より始まる奈良の木下闇
高^た円^か山^まは別の匂ひの木下闇
余所者に首回しけり羽抜鶏
青鷺の一と蹴りしたる水匂ふ
木下闇半切桶に酔の匂ひ
ひばり野に鎧の稚児の降ろされし
傾いて点る神灯遠蛙
溝蓋を走る音する入梅かな
ひと枝の折れしが匂ふトマト苗
新しき杖ついて来し牡丹かな
大椀の木目八十八夜寒
茎立ちて牛もどる日の来たりけり
こひのぼりエプロンかけたりはづしたり
をさな子と踏むいてをり更衣
兄の忌へ新樹の橋を渡りけり

大和郡山 城 孝子
西宮 米澤 光子
八幡 大山 文子

選のあとに

山尾 玉藻

鳥籠の布一枚の明易し

丸山 照子

鳥類は夜目が効かない。灯ともし頃となると籠に布を被せ、鳥を早々に眠らせてやらねばならない。しかしその分、鳥の朝は早い。その点で、掲句はつい平板な句のように思われがちだが、決してそうではない。掲句の眼目は「布一枚の」の集約された表現にある。読み手はこの表現により、布で覆われてよりの鳥籠の中の鳥にとつての短夜を思い、今はその中で既に目覚めている鳥影の様子をもころろに結ぶこととなる。平明な詠みぶりに巧みさをひそませた秀句である。

ががんぼの全き影を怖れけり

戸栗 末廣

「ががんぼ」はもろい虫で、脚の欠けたものをよく見かける。いずれも憐れで、儂げな様子である。ところが一本も脚を欠かさず踏ん張っている姿は、思いのほか大きく感じる。まして、灯に照らされて影を落としていると、尚更立派に感じるものなのだろう。そこに驚きを感じた作者なのである。やや大袈裟な「怖れけり」の表現が、却つてががんぼの本来のか弱さを強調することとなり、その点が面白い。

まつさらの湯の痛しとも夜の新樹

山田美恵子

瑞々しい若葉に包まれる夜は、身もこころも清新な思いになり、何事も感受し易くなるのだろう。「夜の新樹」の季語の

幹旋で「まつさらの湯の痛し」の感性に説得力が生まれた。

交番より始まる奈良の木下闇

大山 文子

同じ古都の京都に比べ、奈良は鄙びた趣が濃い地である。この「交番」も小さなもので、厳めしさと言うよりは懐かしさを感じさせるような佇まいであったのだろう。同時作にたかまど高円山は別の匂ひの木下闇ももある。

溝蓋を走る音する入梅かな

米澤 光子

「入梅」は立春から数えて百三十五日目の日であるが、実際に雨が降るとは限らない。掲句も雨を直に感じさせるものではないが、「溝蓋を走る音」はそれほど快いひびきのものでなく、本格的な梅雨人が近いことを聴覚で感じさせている。

こいのぼりエプロンかけたりはづしたり

城 孝子

子供の日には子や孫が集まり、常にもまして多忙な作者である。「エプロンかけたりはづしたり」で、愛しき者たちの為に嬉々として立ち居振舞う姿が偲ばれる。

壬生狂言日の翳りたる手摺かな

小林 成子

壬生狂言の舞台と客席は別棟で、二階フロアが向き合ったものである。舞台は手摺で囲われた簡素なオープンステージ、客席は庇があるだけの棧敷席と言う、なかなか鄙びた趣である。舞台と客席の間を早春の風が吹きぬけ、時には蝶々が過つてゆく。「日の翳りたる手摺かな」より、舞台も演者も急に薄暗くなった様子が窺える。何気ない景を切り取り、移ろい易い春空の下の「壬生狂言」ならではの趣を伝えている。

恒星圈

大東由美子

ていねいに鋤簾つかひし田水引
石垣に立ちほだかれる花菖蒲
鳶に鳶おそひかかりし夏野かな
太陽に黒点いくつサングラス
畳みあるままにハンカチ使ひけり

坂口夫佐子

高尾豊子

お地蔵は洗ひに出さる茎立菜
風光る金魚田の水抜かれあり
梅雨入の嘴の藁屑とびたてり
風立つや蝶振りはらふ薔薇の花
観音の扉の立てられし墓

吾子の歯の一本生えし大南風
さくら弁当乗せて特急列車かな
初河鹿日に日に変はる山の色
じやがたらの花新客を迎へたる
目録の読めぬ漢字や桐の花

城孝子

高松由利子

背になじむデッキエアールや花は葉に
花みかん遍路の笠のすれ違ひ
真珠島にさみだるる音してゐたり
夕なづむ十葉にほふ母の膝
馬の瞳に映れる木曾の若葉冷

巫女の朱のひるがへりける立夏かな
おほかたは錦市場にしきに暮らし祭笛
繁体字ばかりがあふれ麦の秋
六月の闇に気根の太りけり
芍薬や一貫張の面ゆがみ

獅子座

山尾玉藻推薦

松山直美

蘭定かず子

夕餉まで歩く城下や花しやうぶ
氏神に嬰見せにゆく麦の秋
包帯に指締まりゆく走り梅雨
白南風の改札に聞く伊勢訛

村上留美子

下闇の鷺の立てたる水しづき
薫風やオーブンカフェの緋毛氈
子雀のふと鳴き止みし日照雨かな
川開きの明日となりたる橋の艶

長田曄子

耳遠き夫剥きくれし夏みかん
葉ざくくらはや同窓会の杖の数
青梅をうかうかと踏み夕づきぬ
夜のみどり爪も手相も母似なる

奥田順子

水音の変はる辺りの著莪の花
夕焼に山法師の花浮みたる
牡丹の咲き過ぎてゐる母の庭
蝸牛や二時間待ちの列に居り
天井に天女舞ひある青葉冷
初蟬や奈良もはづれの小学校
堰止めて蝌蚪の太れる大和かな
さつきから猫呼ぶ声が木下闇

大城戸みさ子

その中の一つ伏せある鵜舟かな
俯けるぼたんを支柱蝶結び
日向水金魚のおもちや裏返る
宵宮の町に入りける旅鞆

西畑敦子

鬼貫の親子墓なり青嵐
草刈つて真つ平らなる海となる
丁寧な露刈り残し草刈女
つるみつつ空に静止の黒揚羽